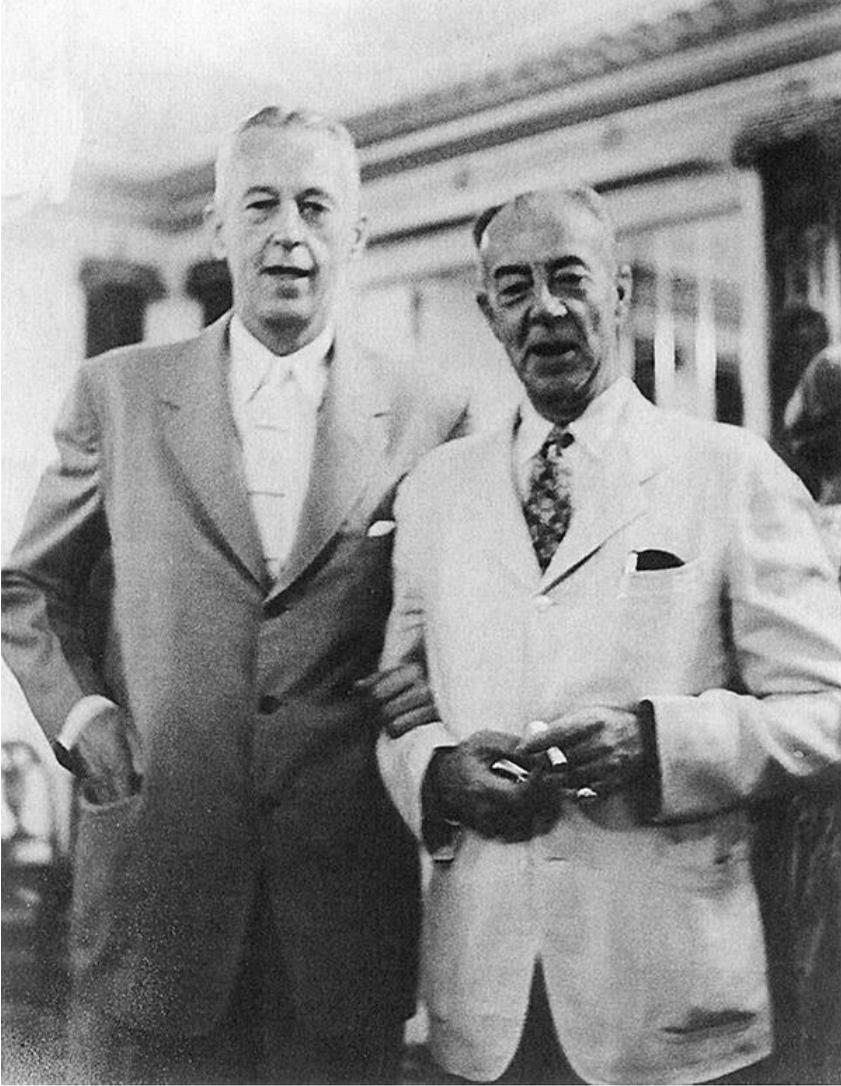


エビー：

ビル・Wのスポンサー





ビル・ウィルソン（左）とエビー
1955年セントルイスで開かれた
第2回AAインターナショナル・コンベンションにて
（AAアーカイブより）

エビー

ビル・Wのスポンサー

メル・B

すべてのAAメンバーはエビーが開けたその偉大なる門をくぐって神の
もとの自由を見つけた

—ビル・W「エビーを偲んで」
(AAグレープバイン1966年6月号)

目次

前書き	ix
アノニミティ（無名性）についてのメモ	xiii
謝辞	xv
第1章 旧友からの電話	1
第2章 違う世界からの友人	13
第3章 マンチェスターのサマーピープル	21
第4章 オールバニでの輝かしい日々	29
第5章 マンチェスターへの追放	41
第6章 セブラ、シェップ、ローランド	47
第7章 カルバリー伝道所の住人	63
第8章 失意の年月	79
第9章 どん底	97
第10章 テキサスでの再生の時	111
第11章 「理想的な女性」	135
第12章 マクパイク・ファームでの平和	145
第13章 エビーと再発の世界	157
参考文献	165
著者について	167

前書き

1934年のことである。大恐慌の混乱の中、新大統領に選出されたフランクリン・D・ルーズベルトは「我々が恐れなければならない唯一のものは、恐れそのものである」と宣言した。禁酒法が廃止された。映画『キング・コング』がラジオシティ・ミュージックホールを大入り満員にしていた。入場料は10セント。当時、労働者家庭の平均世帯収入は1,048ドルだった。シカゴのバイオグラフィシアターの外では、FBIの一斉射撃が「パブリック・エネミー・No.1」と呼ばれたジョン・ディリンジャー（銀行強盗）を撃ち倒した。ボブ・ホープのラジオショーが始まった。そして、ニューヨーク市では、しらふになったエビー・サッチャーが古くからの飲み友だちであるビル・ウィルソンに電話をかけていた。エビーの電話によって一連の出来事が引き起こされた。それはやがて世界中の何百万人の男女とその家族の人生を良いほうに変えていくのである。

この伝記は、回復のメッセージがエビーからビルに手渡されるハイライト・シーンに続いて、アルコールクス・アノニマス（AA）の共同体とプログラムの基礎が作られ、そして成長していく様子を追っている。こう聞く人がいるかもしれない、「なぜ、エビーの伝記なのか？」と。確かにAA共同体の中では、エビーがAAに果たした重要な役割はただ一つ、ビルに希望のメッセージを運んだことだけだと見なされている。彼はビッグブックの執筆にはほとんど関係していないし、初期のAAの立ち上げや、それを機能するようにするための骨の折れる仕事にも関わっていない。やがて彼はビルとの友情に頼る寄食者だと見なされるようになってしまった。

彼のその後の人生は、どこのAAグループでも見かけるありふれたパターンだった。つまり、まず酒はやめるのだが、その後の回復は度重なるスリップによって中断されてしまうというものだ。では、なぜ私たちはそんな人に興味関心を持つのだろうか。AAプログラムの理解が弱く、

プログラムを実践しても立派な手本になり得ない。にもかかわらず、22年間に渡ってビルはエビーを「自分のスポンサー」だと呼び続けたのである。

AAの起源やこの運動を生み出した人々のことを学ぶことは、AAメンバーにとっても関係者にとってもプラスになり得る。AAの共同創始者であるビル・ウィルソンとドクター・ボブ・スミス、そして彼らの妻ロイスとアンが果たした素晴らしい貢献に対し、私たち全員が感謝するのは公正なことであり、当然でもある。だが、彼らとてまったく何もないところから共同体を作り上げたわけではない。それはAA内外の多くの人の援助と協力があってのことだ。エビー・サッチャーはそうした人々の主要な一人である。

エビーの人生と、彼のAAへの関わり再評価する理由は少なくとも五つ挙げられる。

エビーの人生を知るべき第一の理由は「正直さ」である。AAは正直さが大切なプログラムだとされている。だがAAの歴史については人々に誤解を与えるような、あるいは不十分な情報しか提供されない時代が続いていた。最近まで、オックスフォード・グループの果たした役割を小さく見せようとする努力があった。AAのスピリチュアル(霊的)な原理は、その大部分がこの集団から提供されたものだったにもかかわらずだ。そうした排斥は、おそらく良い目的を目指して行われたものだろう。だが、それは真実がAAにダメージを与えることを暗に示しているかのようだ。それは奇妙な態度である。AAメンバーは、自分自身の生き方に正面から向き合うよう強く促される。真実がメンバー個人にとって善だというのに、AA共同体にとっては善ではないというのか。

エビーの人生を再評価する第二の理由は「感謝」である。ビル・Wには信念があり、エビーがひどく無責任な行動を繰り返したにも関わらず、エビーへの感謝を決して失うことはなかった。これは、飲酒に戻ってしまったスポンサーや仲間に対して、過度に批判的になるAAメンバーには良い戒めとなるだろう。

エビーをより深く理解する第三の理由は「知識」である。その時代を生きていなかったとしても、過去から学ぶことは有益だと誰もが知っている。AA誕生の決定的に重要な時期に、エビーはオックスフォード・グループのメンバーたちから優れたスポンサーシップを受け、そしてそのメッセージを世界中に伝えるのに最も適任の人物に正しく伝えたのである。それ以降多くのことが加えられたにしても、基本的な考え方はいささかも変わらない。人は他の人を助けることによって自らを助けるのである。そのやり方でアルコールクたちは酒をやめ、それを続けてきたのである。

AAのテキストの121~122ページには、他の人への愛と寛大な気持ちをいつも持つことを「守るべき決まり」にするというAAメンバーへの提案が書かれている。AAメンバーや、その他の人たちに対する愛と寛容の実践を学ぶことで、回復が進んでいく。確かにビル・Wはエビーに対して愛と寛容さを示し続けた。例えエビーがAAの中のトラブル・メーカーだったとしてもだ。きっとエビーの伝記を読むことが、「他の人への**愛と寛大な気持ち**をいつも持つこと」について考える機会になるだろう。

エビーの人生を研究する最後の理由は、多くのAAメンバーやAAの友人たちがエビーや彼のたどった運命に対して飽くことのない好奇心を持っているためだ。この好奇心が、本書の筆者メル・Bをしてエビーを研究せしめ、その成果を読者と分かち合わせたのである。メルはこの役割の適任者だ。彼はAAメンバーとして48年を過ごし、多くのパンフレットやAA書籍の著者となった（その中にはAA書籍『*Pass it On*』への寄稿も含まれる）。ビル・ウィルソンの晩年の友人であり、才能あるスピーカーでもある。さらには、多くの著者、アーカイビスト、AAの歴史の学び手に対する無私の指導も、彼の功績として挙げておかねばならない。

メルが本書に託した願いは、エビーに限らず、AAに助けられたが生涯を通じて「完璧」でない人たちに対する認識と理解が広がることである。メルはAAの歴史に関心を持つ人たちのために本書を書いたが、本書は第一には現在AA共同体のメンバーである人たち、将来メンバーになる人た

ちのためのものである。私たち皆が、メルの成し遂げたこの仕事を称えるべきだろう。

ビル・ピットマン
ヘイゼルデン アーカイブ・アーカイブプレス局長

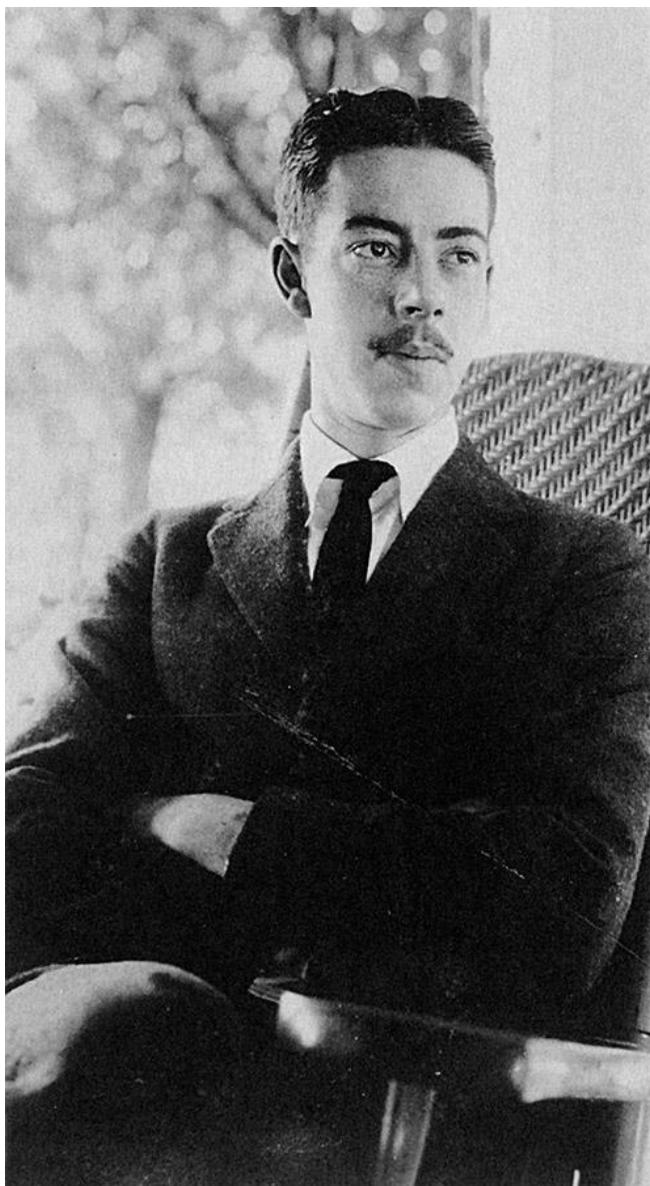
第1章 旧友からの電話

1934年11月の終わりは、ビル・ウィルソンにとって最悪の時だったと言える。彼は失業中で、完全に信用を失った株式仲買人としてニューヨーク市ブルックリンに住んでいた。彼は上流の生活をしていたのに落ちぶれてしまった。わずか6年前には、何もかも彼の思いのままだったというのに。豪華なアパートメント、株式市場の活況がもたらす高収入、金のかかるリゾートでのバカンス、そしてウォール・ストリートのうわべだけの多くの友人たち、彼らは「惜しげもなく大枚のドルをはたいては、とりとめのない話に盛り上がっていた」と後にビルは書いている。

しかし、株式市場の上昇とともに、ビルの人生において別のものも進行していった。彼に打撃を与え、事実上一文無しにしてしまった1929年の「大暴落」の前から、彼のひどい飲酒の問題はコントロールを失っていたのである。1929年から1934年の間に、ビジネスで返り咲く有望な機会を二回、飲酒が台無しにしてしまった。彼はアルコールリズムで二回入院し、もはや廃人となって、デパートの店員として働く妻のわずかな収入に完全に頼りながら、もうすぐどこかに永遠に閉じ込められるのではないかと怯えていた。

そして彼は旧友から一本の電話を受けた。その電話は彼の人生を変えたばかりでなく、その後の驚異的な出来事の連鎖を経て、ビルと同じようにアルコールクス・アノニマスの中でソブラエティを得た何百万人もの人生を変えた。ビルは共同創始者として現在も崇敬されている。

電話をかけたのは、ビルの子供時代からの友人エビー・サッチャーだった。1929年の1月にはエビーとビルは酔っ払って一緒に飛行機に乗った。当時は航空移動が始まって間もなく、それは二人にとって人生の終わりになりかねない正気を失った体験だった。そのぞっとするような経験の後、エビーもまた辛い年月を過ごした。ビルはエビーが精神病院に入れられたと聞いていた。だがこの日エビーはマンハッタンの近くにおいて、



若い頃のエビー（エレン・フィッツパトリック提供）

著者について

メル・B (Mel B.) は、回復中のアルコールクとして、12ステッププログラムをテーマにこれまでに数多くの記事やエッセイを書いてきた。現在は文筆業を引退し、1972年からオハイオ州トリードに住んでいる。フリーランスのライターとして地方出版『ビジネス・ベンチャー』や、トリードの日刊紙『ザ・ブレード』に定期的に寄稿していた。またトリード地区の高齢者向け新聞『メイチャー・リビング』にも寄稿していた。ネブラスカ州ノーフォーク生まれ。第二次世界大戦中はアメリカ海軍に太平洋で従軍し、ミシガン州ジャクソンに長く住んだ。引退したファッション・イラストレーターの妻ローリーとの間に成人した四人の子がおり、六人の孫がいる

メル・B は、ヘイゼルデンのパンフレット *Pride, Step 10: Maintaining My New Life* (プライド、ステップ10：新しい人生を持続する)、*Step 11: Partnership With a Higher Power* (ステップ11：ハイヤー・パワーとのパートナーシップ) の著者である。またヘイゼルデンから書籍 *New Wine* (新しいワイン)、*Walk in Dry Place* (酒のない世界へ) を出版している。

(原書裏表紙)

すべてのAAメンバーはエビー・サッチャーが開けたその偉大なる門をくぐって神のもとの自由を見つけた

—ビル・ウィルソン (AA共同創始者)

現在では数百万人の人たちとその家族が、アルコールクス・アノニマスその他の12ステップ共同体から恩恵を被っている。『エビー：ビル・Wのスポンサー』は、エビー・サッチャーの身に起きた出来事と人生を辿りながら、彼が1934年にビル・ウィルソンに手渡した回復のメッセージに光を当てる。著者はメル・B、歴史家にしてAAの長きにわたるメンバーである。本書はエビー・サッチャーが行った偉大な貢献と、しばしばトラブルに見舞われた彼の人生について、心躍るストーリーを提供してくれる。

「とても重要で興味をそそられた。本書は私がAAの始まりを理解する手助けになり、エビーのライフストーリーは私自身の回復の旅への洞察を与えてくれた」

—ベルニー・D ネブラスカ州オハマ

「『エビー：ビル・Wのスポンサー』は珠玉の一冊だ。AAの歴史について、極めて情報に富み、感動的で、価値ある貢献である。AAの歴史のなかで最も魅力溢れる時期に興味を持つ者は、必ず読まむべきだ」

—ネル・ウィング、引退したAAアーカイビスト
ビル・ウィルソンの秘書 *Grateful to Have Been There*の著者